

# 富山市内遺跡発掘調査概要Ⅱ

## 四方北窪遺跡

1998年3月

富山市教育委員会

例 言

- 1 本書は、富山市四方北窪地内に所在する四方北窪遺跡の発掘調査概要である。
  - 2 調査は、個人住宅建設に伴うもので、国庫補助金及び県費補助金の交付を受け、富山市教育委員会が実施した。
  - 3 調査期間 現地調査 平成9年10月6日～平成9年10月23日  
遺物整理 平成9年10月24日～平成10年3月20日
  - 4 調査担当者 富山市教育委員会 主任学芸員 古川知明
  - 5 調査にあたり、文化庁、富山県教育委員会文化課、富山県埋蔵文化財センターから指導を得た。
  - 6 出土品整理にあたり、宇野隆夫氏（富山大学）、前川要氏（富山大学）、宮田進一氏（富山県埋蔵文化財センター）、塩田明弘氏（魚津市教育委員会）、藤澤良祐氏（財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター）にご教示を得た。記して謝意を表します。
  - 7 遺構記号は、溝：SD、穴：SK、ピット：Pである。
  - 8 出土品の図化作業は、安達志津、古川が行った。
  - 9 出土品及び原図・写真類は、富山市教育委員会が保管している。
  - 10 本書の執筆は、古川が行った。

目次

I 遺跡の位置と環境 .....	1
II 調査の経緯 .....	2
III 調査の概要 .....	4
IV まとめ .....	10
V 四方北窓遺跡から出土した 炭化材の年代と樹種 .....	13
図 版 .....	15
報告書抄録 .....	24



明治43年 陸地測量部測量迅速図 (1:20,000) 上り南岩瀬・四方

## I 遺跡の位置と環境

四方北窪遺跡は、富山市街地の北方約7kmの海岸部、富山市四方北窪地内に所在する。

遺跡は、神通川左岸の海岸砂丘内側の低湿地上に立地し、標高は1~1.5mを測る。現在の神通川河口から西へ1.8km、海岸汀線からは約300mの距離にある。

標高は現況で1.7~2mを測るが、遺構検出レベルでは1.1~1.3mで、溝等の底面ではマイナス0.3mに至る箇所もある。遺跡の基盤となる層は灰オリーブ色の粘性の高い粘土で構成され、標高0m前後では青灰色の粗砂となる。粘土と粗砂の境目からは地下水が激しく噴出する。

遺跡の東側はシルト質砂土を主体とする河川堆積物が広がる。ここはかつての神通川流路であったところで、「越中記」によれば江戸時代万治元年（1658）の大洪水で東岩瀬に流れができ、その後寛文8~9（1668~69）年の洪水以後本流は東岩瀬側となった。これがほぼ現在の流路である。西岩瀬側の川は以後古川と呼ばれた。これは次第に縮小し現在は細い流れとなっている。

遺跡の北~西側一帯は「四方西岩瀬」と呼ばれている。

神通川河口周辺は古代には新川郡石勢郷に含まれる。「延喜式」や「倭名類聚抄」にみえる磐瀬駅はこの河口周辺のいずれかに置いたとみられ、西岩瀬が候補地と考えられている。

日本最古の海商法「廻船式目」（貞応2（1223）年）でかかげられる三津七湊のうち、七湊の一つに越中岩瀬湊がある。この湊は西岩瀬港をさすもので、この繁栄は享保年間頃まで加賀藩の米積出港として利用されるなどして継ぎ、江戸十三港のうち第8番に「越中州八重津西岩瀬港」とあげられるまでになったが、寛文期以後は東岩瀬港に機能が移転したため、小規模な漁港として今日まで利用されている。

西岩瀬は現在、海岸が諫訪神社のすぐ北側まで接近しているが、寛文年中（1661~1673）は西岩瀬町域の北端から海岸まで400間があったとされ、また海禅寺所蔵の貞享年間（1684~1688）の「西岩瀬古図」によると、現在の汀線あたりが当時の本通りで、そこからさらに北側へ町屋・道路が延びている様子が描かれている。これらは、港町として栄えた西岩瀬町が、海岸浸食により次第に後退した様子を物語るものである。現在も浸食は進行しつつあるため、防波堤や防波ブロックにより砂の流出が食い止められている。

周囲の遺跡を見ると、縄文時代は四方荒屋遺跡で縄文後期~晩期の土器、千原崎遺跡で中期から晩期の土器が出土しているが少量であり、遺構を伴わなかつたり二次堆積であつたりしており、集落の形成は積極的には認められない。

弥生時代中期から古墳時代前期にかけては、大規模な集落が形成される。江代割遺跡、四方荒屋遺跡で竪穴住居が検出されている。いずれも弥生時代後期に洪水による冠水があり集落は埋没しているが、古墳時代前期（月影期）に再び集落が形成され、それ以後は比較的安定した集落形成がなされたようである。

奈良・平安時代には、対岸の岩瀬・米田・豊田の河岸段丘上に官的施設と推定される遺跡が出現する。米田大覚遺跡では掘立柱建物群・竪穴住居群が検出され、井戸祭祀や則天文字を記した墨書き土器の出土がある。豊田大塚遺跡では、平安時代の溝に、「神服小年賀」と書かれた人形や人面墨書き土器の出土があり、祓など律令祭祀の場と考えられている。

中世においては、本遺跡と隣接する四方荒屋遺跡で掘立柱建物跡と中世陶磁器が検出されているほかは遺跡として確認されたものはないが、一帯の各遺跡で中世陶磁器が採集されているところからみると、遺跡数は多数に上るものと考えられる。

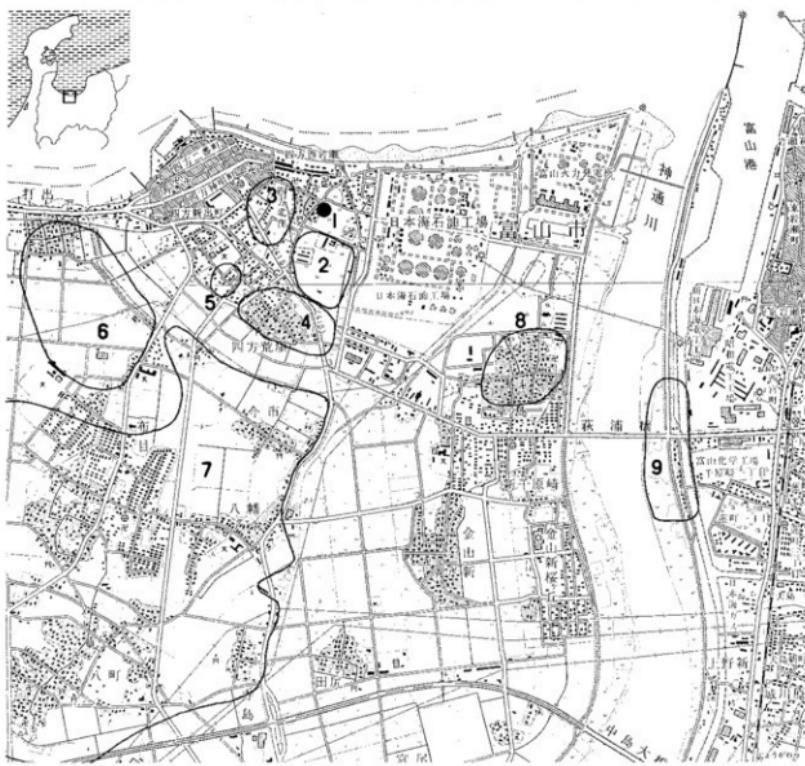
## Ⅱ 調査の経緯

四方北窪遺跡は、昭和63～平成3年に行われた市内分布調査によって発見された遺跡である。

No012四方北窪遺跡として平成5年3月発行『富山市遺跡地図（改訂版）』に登載され、周知の埋蔵文化財包蔵地として知られることになった。

分布調査の際の現地確認では、一帯は水田地帯で、土師器・珠洲焼が地表面に分布しており、平安から中世にかけて営まれた遺跡であると推定されていた。

この水田地帯を分譲宅地として開発する計画が民間開発業者によって平成8年になされ、同年5月



第1図 四方北窪遺跡と周辺の遺跡 (1 : 25,000)

- |                    |                        |
|--------------------|------------------------|
| 1 四方北窪遺跡（中世／集落跡）   | 2 四方荒屋遺跡（古代～中世／集落跡／畠跡） |
| 3 四方西野割遺跡（平安～中世）   | 4 四方背戸割遺跡（弥生～古墳／集落跡）   |
| 5 江代割遺跡（弥生～古墳／集落跡） | 6 打出遺跡（古墳～中世）          |
| 7 今市遺跡（縄文～中世／集落跡）  | 8 草島遺跡（中世～近世）          |
| 9 千原崎遺跡（近世初期／集落跡）  | 注 (年代／種別)は主たるもの        |

に約25,000m<sup>2</sup>を対象として試掘調査を実施したところ、現在の集落寄りに平安時代及び中世の集落遺跡が所在することが明らかとなった。このためこの周辺は開発計画から除外されることとなった。

遺跡推定地は全体を対象とした試掘調査によって遺跡が確認されたのは東端部のみで、遺跡はさらにそこから西側へ広がることが推測されたが、既に現在の集落の下で、広がりを確認することは困



第2図 発掘調査区域図 (1 : 2,500)

難であった。調査では、平安時代の須恵器・土師器・土錐、室町時代の土師質小皿・珠洲焼・鐵冶滓が溝や柱穴に伴って出土したほか、遺物包含層から弥生土器・近世陶磁器・骨片などが出土した。

平成9年3月この範囲に個人住宅建設の計画がなされた。既に試掘調査によって遺跡の所在が確認されていたため、協議の結果敷地面積498m<sup>2</sup>のうち住宅部分90m<sup>2</sup>について発掘調査を実施することとなった。

調査は平成9年10月6日から同年10月23日まで行った。

また、この北側40m地点において、分譲宅地造成に伴い山武考古学研究所（所長平岡和夫）の協力を得て548m<sup>2</sup>の発掘調査を9月～10月に実施しており（以下「1次地区」という）、層序や遺構（溝）に今回調査区との連続性が認められた。

### III 調査の概要

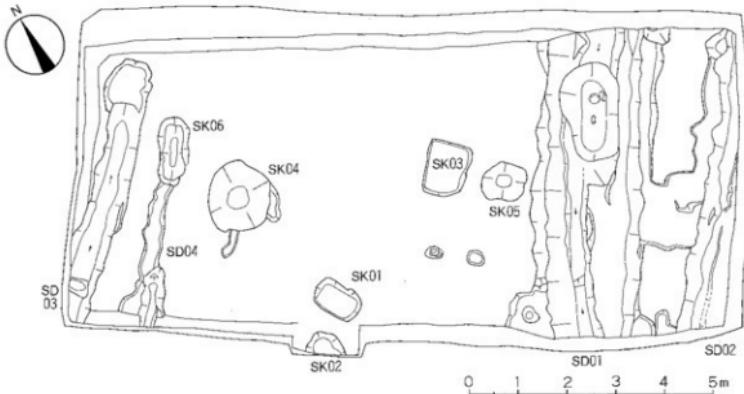
#### 1 概要（第3図）

調査では遺構確認面を2面検出した。上面では焼壁土坑1基、下面では土坑5基、溝4本がある。溝はいずれも南西から北東方向に延びているが、中世の溝SD01の水流方向は北から南と考えられ、管理された区画溝であったと考えられる。SD01の上部出土の天目写の瓦質土器には「天□？」の二字と思われる刻書が認められた。

#### 2 基本層序（第4図）

第1層黒灰色シルト質砂土（水田耕作土、厚さ20cm）、第2層くすんだ黄褐色土（厚さ5cm、耕盤土）、第3層暗褐色土（弱粘性）、第4層暗褐色土（弱粘性、遺物包含層）、第5層灰オーブ色粘質土（地山）となり、第4層下部と第5層上面が遺構検出面となる。第4層下部の検出面は焼壁土坑SK01の検出に伴い把握できたもので、周囲の土層断面の観察では第4層中にこの検出面を確認することはできなかった。

なお、3～5層については1次地区と共通した土層堆積をみており、名称等を統一した。



第3図 遺構全体図（1：100）

### 3 遺構（第5～6図）

土坑、溝が多い。SK01は第4層下部を掘込み面とし、その他は第5層直上を掘込み面としている。

**SK01**（第5図、図版4～5） 壁面の上半部が焼けて赤化している土坑で、いわゆる焼壁土坑である。他の遺構面よりも5cm上位で確認した。平面プランは隅丸長方形で、1.0×0.6mの規模である。

底面に厚さ約5cmの黄褐色粘土を平坦に敷き、その上に5個の長円窓を配置している。その上で竹や落葉樹を使用して遺体を焼き、わずかな骨片を残して焼成後黄色粘土で埋めている。

骨片は残存量が8gと僅少である。また、出土した炭化物の総重量は1,780gで、95%が広葉樹（コナラ・サカキ・ナツツバキ・カエデ）が占め、4%が竹（竹亞科）、1%がタール状の炭化物である。火葬坑と考えられる。火葬された哺乳類の種は不明である。

**SK02**（第5図） 南北に延びる楕円形土坑の北半部を検出した。短径約70cm、深さ40cmを測る。炭化物等は伴わず、SK01とは性格を異にする土坑である。出土遺物はない。

**SK03** 45×40cmのほぼ円形の土坑で、深さは30cmを測る。上半は褐色土、下半は暗褐色土である。中世の非クロロ土師質小皿とロクロ土師質小皿が出土しており、中世前期に構築された遺構と考えられる。

**SK04**（第6図） 円形摺鉢状の土坑で、上面の直径130cm、底面径45cm、深さ75cmを測る。性格は不明で、出土遺物はない。

**SK06**（第5図、第7図） 元来120×45cmの長円形の土坑で、周囲10cm程にわたり上部5cmが浅く抉られている。出土遺物には土器類の小型壺があり、平安時代に構築された遺構と考えられる

**SD01**（第6図） 検出面で幅約2.2mの溝で、3期の変遷がある。

第Ⅰ期は1.8m以上の上端幅をもつ溝で、西壁は40°の傾斜を持つ。西壁下には底面より一段深い幅40cm深さ20cmの溝が走り、北側の2.0×1.0mの楕円形の落込みにつながって消える。下半は暗青灰色粘土、上半は暗褐色土が主な埋土となる。

第Ⅱ期は幅1.6mの溝で、深さは40cmを測る。壁の傾斜は40°である。厚さ3～10cm程度の薄い層のレンズ状堆積が特徴的である。

第Ⅲ期は幅90cm、深さ40cmの溝で、壁の傾斜は50°である。基底部に薄い粘土層の堆積があり、その上に灰褐色土が厚く堆積する。

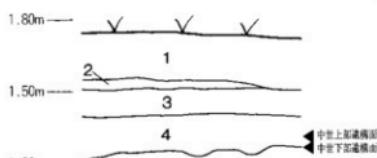
第Ⅰ期から第Ⅲ期にかけて、溝幅は徐々に東壁側に向って狭くなっていく。東壁はどの時期においてもほぼ変わることから、溝の管理は東側が重点的に行われていたと考えられる。

出土遺物には、弥生時代後期の甕、古代の須恵器甕、土師質土錐、珠洲焼（片口鉢・大甕・破片利用の円板）、土師質小皿、土師質土器脚部、瀬戸美濃焼、砥石、敲石などがある。

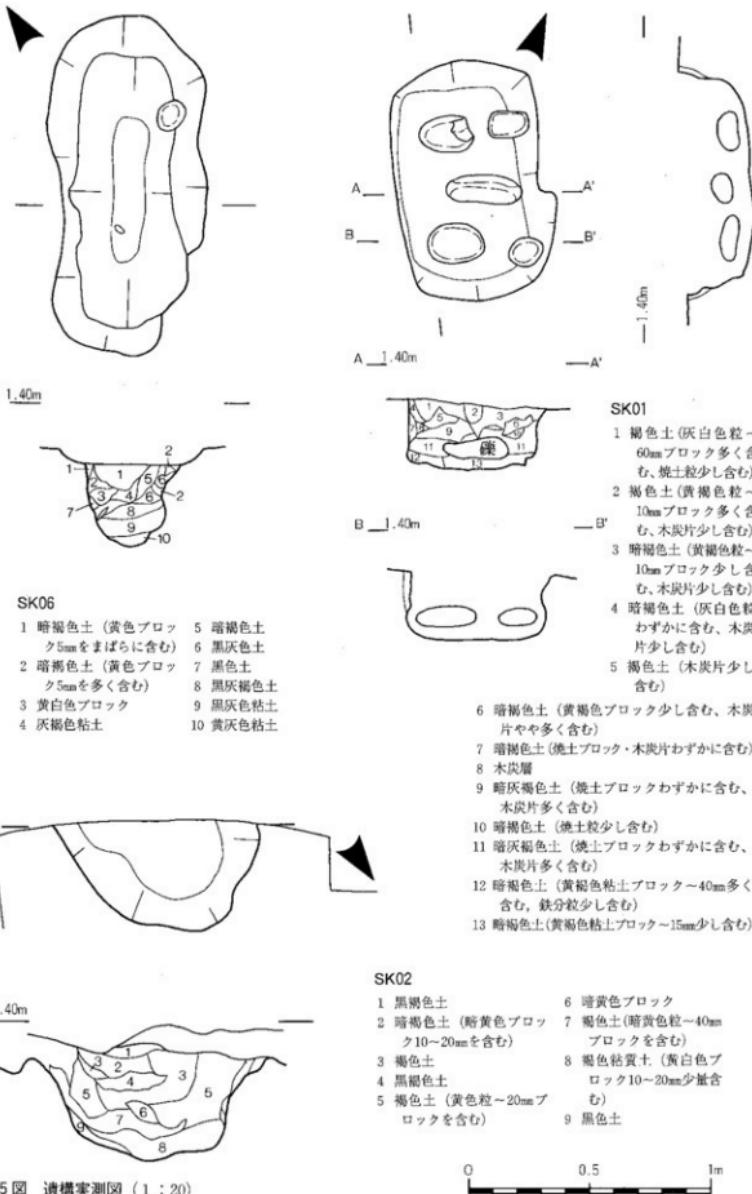
古代以前の遺物は摩滅が著しく、出土品の大半が中世のものであることから、この溝は中世前半以後機能した溝跡と考えられる。

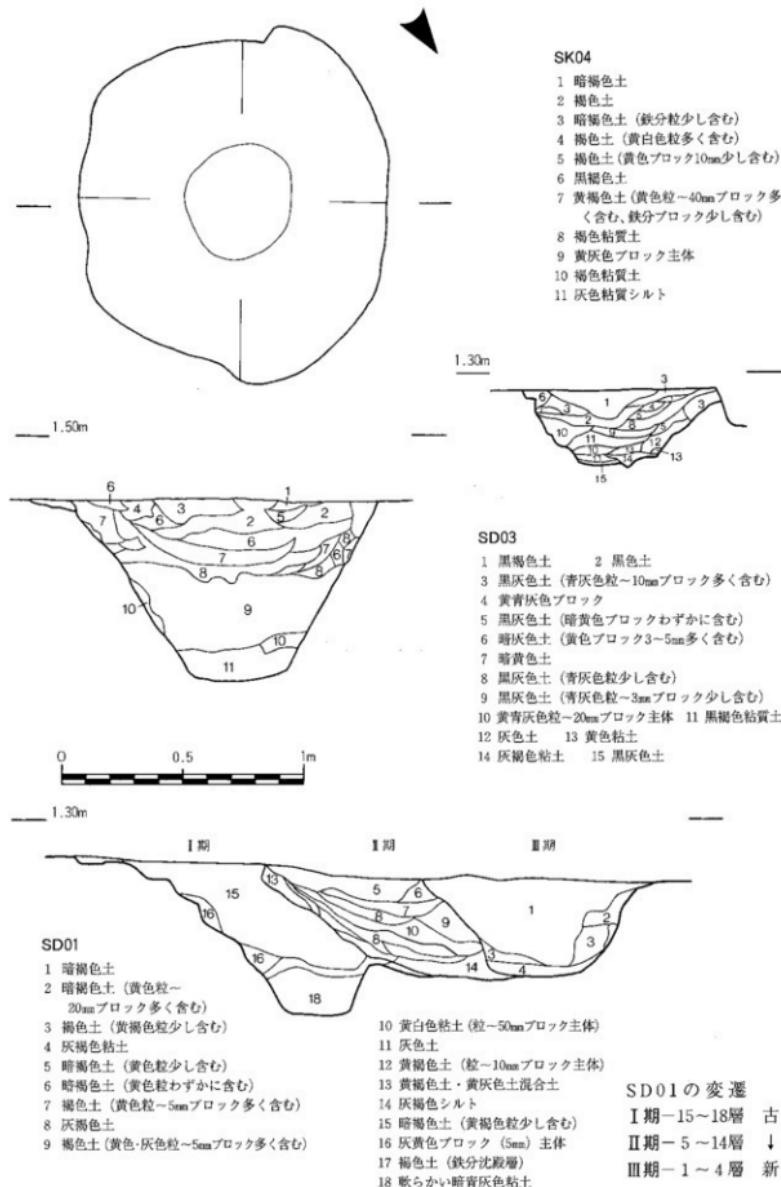
**SD02**

SD01の東側に平行して走る溝である。緩やかな傾斜をもつ西壁のみを検出しており、深さは40cmを測る。



第4図 基本層図 (X357, Y625) 1:20





第6図 遺構実測図（1:20）

出土遺物には、古墳時代の土師器、奈良時代後半の須恵器、珠洲焼（片口鉢・大甕・破片利用の円板）、瀬戸美濃焼、鎌治津がある。中世（14～15世紀）に存続した溝跡と考えられる。

#### SD03（第6図）

調査区の西端で確認した南北方向の溝である。幅約70cm、深さは約30cmを測る。厚さ2～5cmの薄い土層がレンズ状堆積をみせる。SD01の第Ⅱ期の堆積状況に似る。出土遺物はない。

#### 4 遺物（第7図、図版6～7）

##### （1）遺構出土の遺物

主に溝SD01から多く出土した。出土総数は30点で、古墳時代前期から中世段階の遺物が出土した。

**土師器（1）** 小型甕で、口縁は外反して立ち、端部を細く丸めてやや外傾させている。9世紀後半頃のものと考えられる。

**須恵器（2、3）** 焼成が不完全で灰黄色を呈する。2は杯蓋で、端部断面はやや丸みのある三角形状となる。3は杯の口縁部で、体部は厚みがあり、外傾が大きい。奈良時代後半に属するものと考えられる。いずれもSD04出土。

**土師質土器（6）** 火鉢、鍋、風炉あるいは香炉などの脚部付根の表面部と考えられる。削りにより稜を作り出している。土師質であるが、当初からの酸化焼成か二次被熱かは不明。中世後半のものか。

**珠洲焼（5、10～12）** 5、10は口縁端部の内側に面をもつ片口鉢である。5の内面には15本の卸し目をやや間隔を開けて引く。10はやや肥厚した口縁端部が少し垂む。11はやや肥厚した口縁端部に横目文を短く平行に施文する。珠洲焼編年（吉岡1994）によれば、10、11は第Ⅳ期（14世紀）、5は第V期（14世紀後半～15世紀前半）に属する。ほかに甕の体部片がある。いずれも土器胎土に海綿骨針を含んでいる。7、11の含有量は微少である。5はSD02、10は4層中、11はSD01Ⅲ期出土。

**陶製円板（4、7～9）** 珠洲焼片を使用して作った円板である。4、7、9は甕の体部、8は片口鉢（摺鉢）の体部を利用している。円形を意図して製作しているようであるが、表裏両面から行われる周辺部の調整はかなり粗く、精円形、長方形化している。3～4.5cmの大きさである。

4はSD02、7～9はSD01のI・Ⅲ期出土。

**瓦質土器（13）** 天目茶碗を模倣したもので、高台の上1.5cmのところに釉溜りを模した幅1～5mm高さ1.5mmの隆帯が廻る。高台は約1.5mmの浅い削り出しである。釉ぎれ部を除く内外面には黄褐色の漆が塗布されている。もとは高台脇にも下塗りと思われる淡赤褐色の漆が塗られていたが、剥落したものと考えられる。高台中央には「天□？」と二文字の刻書がある。胎土には多くの石英粒とごく微量の海綿骨針を含む。SD01Ⅲ期出土。

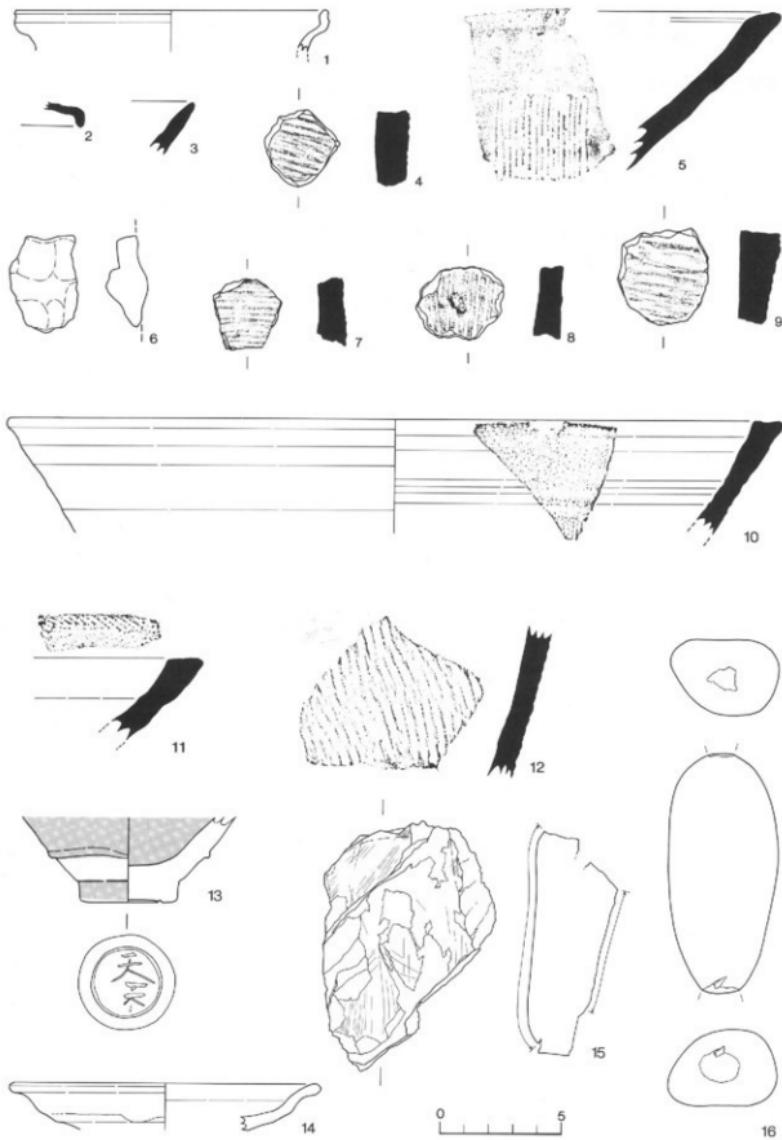
**瀬戸美濃焼（14）** 灰釉腰折皿で、口縁は短く外反し端部を丸く收める。体部下半は大きく削って整形する。SD02出土。

**叩石（11）** 泥岩質で、細長い円碟の長軸両端に敲打面がある。図下側の敲打部はよく使い込まれている。碟表面には長さ5～10mmの線条痕が10数か所みられる。SD01Ⅲ期出土。

**砥石（15）** 泥岩質の中砥で、長軸方向の擦痕が多く認められる。中央部から図上端部にかけては擦痕方向がわからないほど光沢を帯びる。裏面にも一部研面が見られるが、ほとんど使用されていない。SD01Ⅲ期出土。

**鎌治津** 炉底滓と推定される鎌治津がある。炉底縁部の砂質土が付着する。重量65g。SD02出土。

**（2）包含層出土の遺物** 古墳時代初期の土師器（甕）、古代の土師器（甕）、須恵器（杯）、中世の珠洲焼、14世紀代の土師質小皿、近世の唐津焼（皿）、越中瀬戸焼（鉄釉碗）がある。



第7図 出土遺物 1/2

アミ目は塗部分

## IVまとめ

### 焼壁土坑について

焼壁土坑SK01は、遺構解説の項で述べたように、火葬場(坑)とみられる。その築造工程は、①地山を長方形に掘窪める。掘上げた土は横に置く。②黄褐色粘土を持ち込んで、厚さ5cm程度に穴の底に敷き、平坦面を作る。③長めの円碟5個をその上に配置する。碟は穴底の四隅及び中央に配する。碟の長軸はいずれも土坑の短軸方向と同一である。④遺体を安置し、竹や雑木を積み上げて「荼毘」に附す。このとき碟の表面は被熱する。⑤火葬が完了後、焼骨はほとんど片付けられるが、灰や炭は片付けずにそのままとし、⑥で掘上げておいた土を被せる。という5段階の火葬過程がみられる。第5段階において灰の中には骨片がわずか8gしか残存していない状況から、骨上げ行為はきちんとなされたと考えられる。

年代は出土遺物がないため不明であるが、他の遺構よりも数センチ上位面での確認であることから、溝等他の遺構の年代の下限である15世紀代を遡るものではないと考えられる。C14年代でもデータのひとつはAD1600年とされ、結果には整合性がある。

同様な遺構は、15世紀代の鎌倉市永福寺奥杉ヶ谷火葬跡にある。杉ヶ谷では、約1.0×0.6mの浅い長方形土坑内に棺台とみられる2個の碟を配し、周囲は焼けている。火葬骨の骨上げはみられるが、とり残しが多いとみられている。四方北窓遺跡の例は、杉ヶ谷例と規模や構造について非常に似通っている。杉ヶ谷の場合は火葬された対象は永福寺関係者と推定されている。本遺跡では最寄りに中世以前に遡る寺院とみられる淨光寺が所在していることから、杉ヶ谷例と同様に淨光寺との関連性も考慮できよう。

なお、火葬墓あるいは火葬場とみられる遺跡は、新潟県柏崎市小児石遺跡で中世後期（15～16世紀）の土壙墓を火葬墓とみているほか、富山県福光町梅原胡摩堂遺跡では中世前期（15～16世紀）に底や壁面に碟を敷き詰めた石組遺構（SX2458）があり、石組みの内面が被熱していることから、火葬炉あるいは集石墓・碟標墓とみている。また富山市吉倉A遺跡では焼土・炭化物を含む土坑に、銅鏡と土師器が副葬されていることから、火葬墓の可能性が考えられている。本遺跡はその築造工程からみて「墓地」ではなく「火葬場」として認識できる。梅原胡摩堂遺跡の石組遺構も同様に理解できるだろう。

### 遺跡の性格と地割りについて

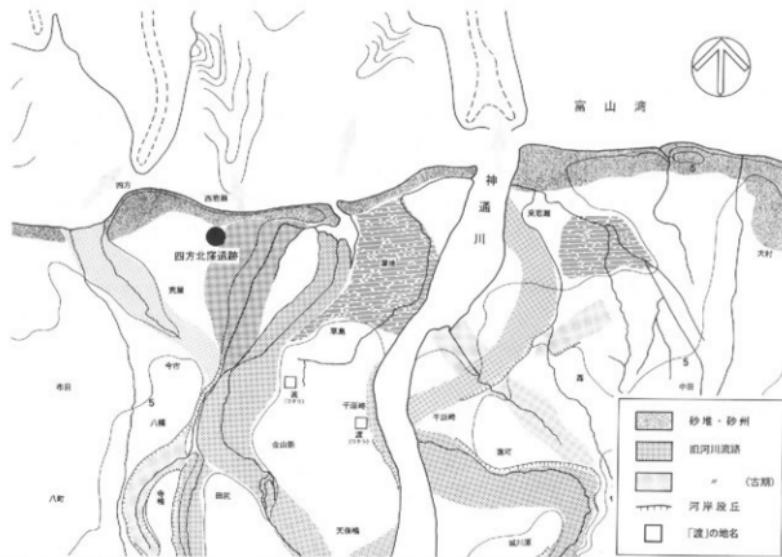
四方北窓遺跡は、分布調査により古代～中世の遺跡と把握されていた。ほぼ遺跡全体を対象とした試掘調査の結果、遺跡は平安時代と室町時代の集落遺跡で、江紋神社の北側、淨光寺を中心とする現在の集落直下に広がることが明らかにされていた。

今回調査地は遺跡の東端部にあたり、中～近世にかけて存在した神通川旧流路に面する位置にある。調査区東端部で確認された溝群は、集落の東端の境界を区画する性格を有するものと考えられる。

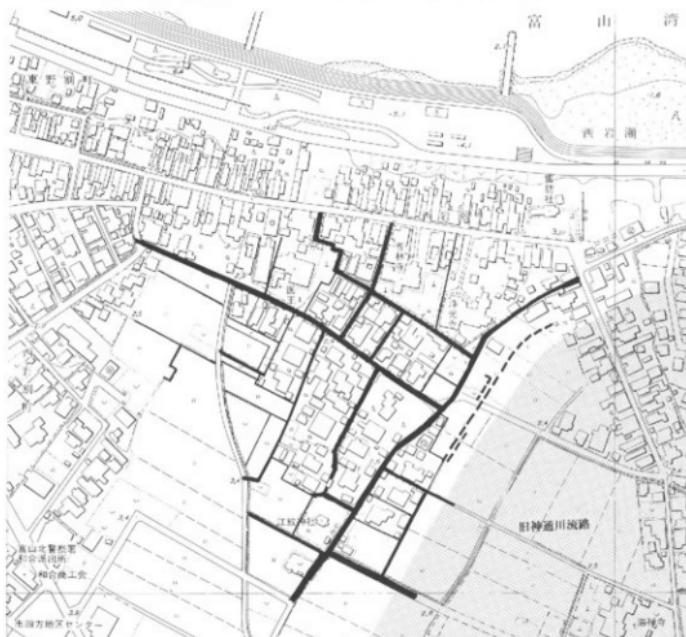
その内側には、土坑や墓地などが見られる。調査地点では建物は確認されていない。居住域はさらに西側に存在するものと考えられる。

I章で述べたとおり、遺跡の所在する区域は立地条件等から推測して、中世以降港町として繁栄した「西岩瀬町」の範囲に含まれると考えられる。

調査区の東端で検出された溝SD01とそれと連続する1次地区的溝SD-1の方向（N-30°E）は、近世の旧神通川流路の方向とほぼ一致する。溝は神通川流路の方向を意識して構築されていたとみられ、その構築年代は14世紀代と見られることから、近世段階の旧神通川流路の形成は14世紀代にまで



第8図 遺跡周辺の古地理復元概念図 アミの矢印は神通川旧・現流路の出口を示す



第9図 遺跡周辺の道路地割（黒線）と区画溝（点線）（1：4,000）

過ると考えられる。

この方向（N-30°-E）を意識した地割は、浄光寺、医王寺、江紋神社を含む区域約6.5haに認められる。これが14世紀以降の中世地割の名残りと考えることができよう。近世以後の周辺の地割りをみると、諏訪社西側ではN-15°-E、西側の宇野町割地内ではN-25°-E、N-60°-E、四方港周辺ではN-63°-Eとなる。いずれも海岸線や河川流路あるいは流路に沿った自然堤防（砂堆）という地形による制約が、集落の地割に影響したものと考えてよく、方位などを意識した地割ではないといえる。

調査地は、1次地区も含め、この中世地割の最も東端寄りに位置し、東を流れる旧神通川の流路源に立地する。その場所には流路と平行した溝が走っており、これは集落と河川を分ける区画溝としての性格を考えることができる。このすぐ内側、すなわち居住域側では各種溝、土坑、火葬墓が検出されており、居住地周囲の墓地その他の区域として利用された場所とみられる。中世の居住地はこれよりさらに西側に展開するものと推定される。

#### 刻書土器について

瓦質碗に見られる刻書は、「天」ともう1文字があるとみられ、2文字目は「天」または「木」の可能性が高い。文字は漆を塗布した上から刻まれており、完成後に刻書されたものである。

瓦質碗は天目茶碗を模倣したものである。鉄釉の色を意識したと思われる黄褐色の漆を内外面に塗布し、釉溜りの状況までを忠実に描いている。高台脇の状況から下地には淡赤褐色の薄い漆を塗っているとみられる。碗の底部は輪高台を模したものとみられるが、高台の削り込みが浅く、また高台脇に削り込まれた段をもたないことなどから、中国福建省水吉県の建窯で焼かれた建盏と呼ばれる天目茶碗の模倣と考えられる（藤澤良祐氏の御教示による）。

SD01からは14世紀～15世紀前半までの珠洲焼等が出土し、また隣接するSD02から出土した美濃瀬戸皿は寝窓期の製品で後IV新段階、15世紀第3四半期後半頃とみられることから、この土器の年代も15世紀代と考えられよう。

同様な天目模倣瓦質碗は北海道上ノ国勝山館跡、青森県史跡浪岡城跡、新潟県中条町江上館跡から出土している。いずれも館跡からの出土品である。

この瓦質土器の胎土には、微量だが海綿骨針が含まれる。このような胎土の選択は北陸では比較的多く、広い意味で在地での製作と考えられる。ただし、天目模倣瓦質碗は希有な出土であることを考慮すれば、西岩瀬湊が港湾都市であったという特殊性がこのような土器の出土の背景となっていると考えられる。

#### 参考文献

- 梅原隆章・北沢俊樹監修 1978『富山文庫9 富山の寺社』巧玄出版  
河野眞知郎 1995『講談社選書メチエ49 中世都市鎌倉 遺跡が語る武士の都』  
財團法人富山県文化振興財團 1994『富山県文化振興財團埋蔵文化財発掘調査報告第5集 梅原胡摩堂遺跡 発掘調査報告（遺構編）－東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告I』  
塙 照夫 1992『富山県歴史の五街道 北陸道・能登街道・飛騨街道・五箇山街道・立山道』  
高瀬重雄監修 1994『富山県の地名』日本歴史地名大系16 平凡社  
富山県 1982『富山県史 通史編III 近世上』  
富山市教育委員会 1989『昭和63年度富山市埋蔵文化財調査概要』  
富山市 1987『富山市史 通史下』  
富山大百科事典編集事務局編 1994『富山大百科事典』 北日本新聞社  
浪岡町教育委員会 1989『昭和61・62年度浪岡町跡発掘調査報告書 浪岡城跡X』  
布目久三 1982『四方郷土史話』  
北陸中世土器研究会 1994『第7回北陸中世土器研究会 中世北陸の寺院と墓地』  
吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』 吉川弘文館

## V 四方北窓遺跡から出土した炭化材の年代と樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

四方北窓遺跡のSK01は、第4層下部を堀込み面としていることから、中世以降の遺構と考えられる。土坑は、炭化物と骨片が出土していることから火葬坑と考えられる。

本報告では、出土した炭化材の放射性炭素年代測定を行い、遺構の構築年代を推定する。また、炭化材の樹種を明らかにし、用材に関する資料を得る。

### 1 放射性炭素年代測定

#### (1) 試料

試料は、SK01から出土した炭化材である。炭化材は、発掘調査時に一括採取されたもので、1袋中に多数入っていた中から3点を選択した。

#### (2) 方法 測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室が行った。

#### (3) 結果

測定結果を表1に示す。1点は、試料の $\beta$ 線計数率と標準炭素の計数率との差が $2\sigma$ 以上あったため、Modernとした。その他の試料は、1点が $350 \pm 70$ y.B.P.、1点が $1560 \pm 60$ y.B.P.であった。

表1 放射性炭素年代測定結果

遺構名	遺構の性格	試料の質	年代(1950年よりの年数)	Code No
SK01	火葬坑	炭化材	Modern	Gak-19891
			350±70	Gak-19892
			1560±60	Gak-19893

#### (4) 考察

遺構の構築年代は、4層を掘込み面としていること等から中世以降と考えられている。得られた年代値のうち、 $350 \pm 70$ y.B.P. (A.D.1600) は推定されている遺構構築年代を支持している。また、Modernの試料が1点あることも、遺構の構築年代が比較的新しい可能性を示唆する。しかし、1点は年代値が $1560 \pm 60$ y.B.P. (A.D.390) であり、遺構の構築年代よりも古い年代を示している。

試料は、一括採取された中から選択しており、材の使用から埋積に至る過程での条件は同じものと判断される。同じ場所から採取された炭化材の樹種同定では、タケアシ科を含めて5種類が認められており、多くの種類が利用されていた様子がうかがえる。年代値のズレは、使用した木材の樹齢や古材の再利用などによる可能性(東村、1990) や土壤中に含まれる放射性炭素の試料への汚染の影響などが考えられる。今回の測定試料の年代値が別々であるため、遺構の構築年代の詳細を明らかにすることは難しいが、 $350 \pm 70$ y.B.P.は発掘調査所見を支持する結果である。

### 2 炭化材の樹種

(1) 試料 試料は、SK01から採取された炭化材6点(試料番号1~6)である。いずれも火葬の燃料材と考えられている。

#### (2) 方向

木口(横断面)・柵目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

#### (3) 結果

樹種同定結果を表2に示す。試料番号6には2種類が認められた。これらの炭化材は、広葉樹4種

類（コナラ属コナラ亜属コナラ節・サカキ・ナツツバキ属・カエデ属）とイネ科タケ亜科に同定された。各種類の解剖学的特徴などを以下に記す。

表2 樹種同定結果

遺構名(性格)	構築年代	試料番号	用途など	樹種
SK01(火葬坑)	中世以降	1	燃料材	イネ科タケ亜科
		2	燃料材	サカキ
		3	燃料材	サカキ
		4	燃料材	ナツツバキ属
		5	燃料材	サカキ
		6	燃料材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
			燃料材	カエデ属

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で孔圓部は1～2列、孔圓外でやや急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織がある。

・サカキ (*Cleyera japonica* Thunberg pro parte emend.Sieb. et Zucc.) ツバキ科サカキ属

散孔材で管壁は薄く、横断面では多角形、単独または2～3個が複合して配列し、道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性、単列、1～20細胞高。

・ナツツバキ属 (*Stewartia*) ツバキ科

散孔材で、横断面では梢円形、単独および2～3個が複合する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は潰れていて詳細は不明であるが、異性で1～3細胞幅程度。

・カエデ属 (*Acer*) カエデ科

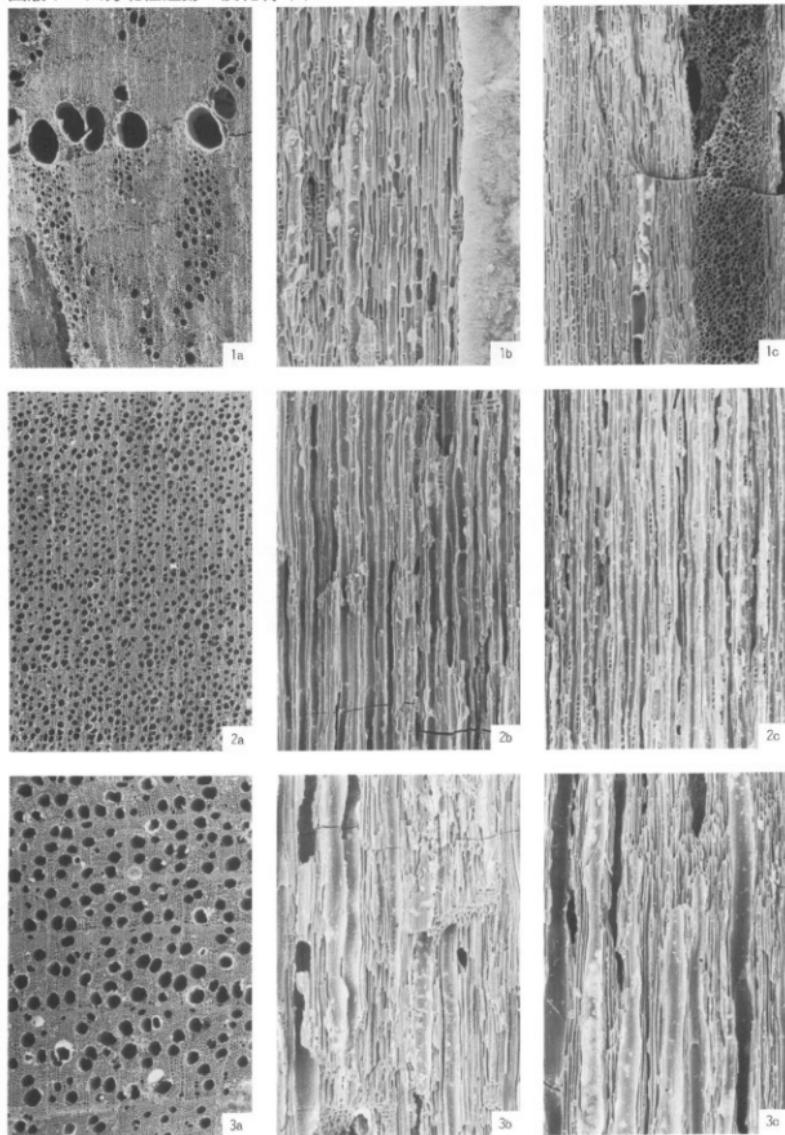
散孔材で管壁は薄く、横断面では角張った梢円形、単独および2～3個が複合、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列～交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～5細胞幅、1～50細胞高。細胞壁の厚さが異なる2種類の木繊維が木口面において不規則な紋様をなす。

(4) 考察

炭化材には、広葉樹4種類とタケ亜科が含まれており、これらが火葬時に燃料材として利用されたことが推定される。この結果から、様々は種類が利用されていた様子がうかがえる。また、中には年代測定結果から古材が含まれている可能性もあるが、木材組織からは古材の有無を特定することはできなかった。

富山県内で火葬坑の燃料材について樹種を明らかにした例は知られていないが、他地域ではいくつかの報告例がある。このうち、神奈川県横浜市上の山遺跡では、中世火葬墓の燃料材に4種類の木材とタケ亜科が認められ（パリノ・サーヴェイ株式会社, 1992）、今回とよく似た結果である。上の山遺跡から出土したタケ亜科は、径が太いものと細いものがあり、葉も確認されたことから、葉が付いた状態のタケをそのまま燃やしたような状況も推定されている。火葬の際の種火としてタケ亜科を使用するような慣習が存在した可能性もある。しかし、現時点で詳細は不明であり、類例の蓄積段階にあると思われる。

図版1 四方北窓遺跡・炭化材(1)



1.コナラ属コナラ亜属コナラ筋 (試料番号6)

2.サカキ (試料番号2)

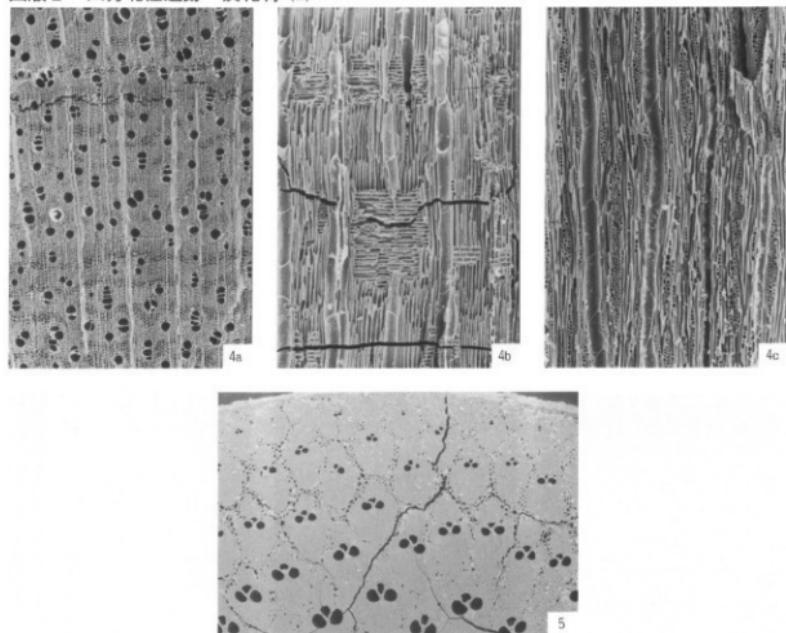
3.ナツツバキ属 (試料番号4)

a:木口, b:径目, c:板目

— 200  $\mu$ m : a

— 200  $\mu$ m : b, c

図版2 四方北窓遺跡・炭化材(2)



4.カエデ属 (試料番号6) a:木口, b:柾目, c:板目  
5.イネ科タケ亜科 (試料番号1) 横断面

— 200  $\mu$ m : 4a, 5  
— 200  $\mu$ m : 4b, 4c

<引用文献>

東村武信 (1990) 改訂 考古学と物理化学. 212p., 学生社.

パリノ・サーヴェイ株式会社 (1992) 上の山遺跡植物遺体同定. 港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報XⅢ「上の山遺跡」, p.196-202, 横浜市埋蔵文化財センター.



調査区全景（北西から）



溝 SD01 全景（北東から）



溝 SD03 全景（南西から）



溝 SD04 土層（北東から）



土坑 SK02 土層（北東から）



遺構検出状況（西から）



溝 SD02 遺物出土状況（南西から）



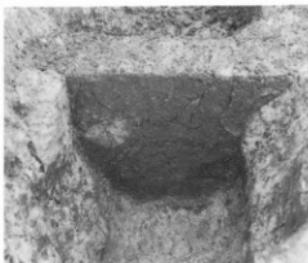
基本土層（南壁西寄り部分）



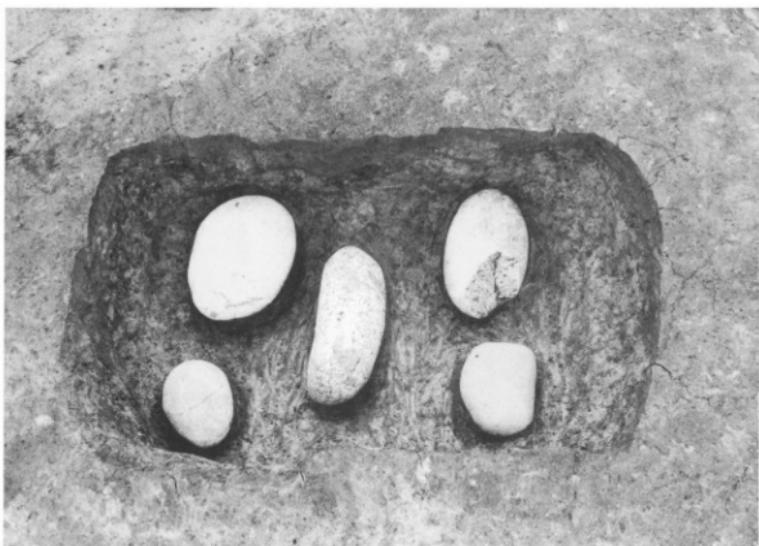
溝 SD03 土層（北東から）



溝 SD01 土層（南西から）



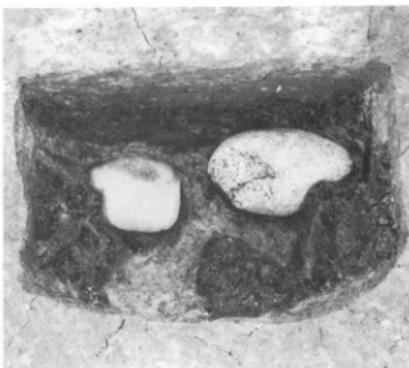
土坑 SK06 土層（南西から）



焼壁土坑 SK01 配石状況（北東から）



焼壁土坑 SK01 中層木炭片・骨片出土状況（北東から）

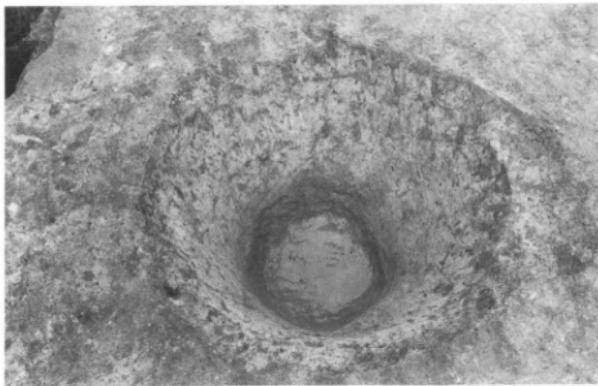


上左  
焼壁土坑 SK01 土層

上右  
焼壁土坑 SK01 部分



土坑 SK04 土層（北東から）



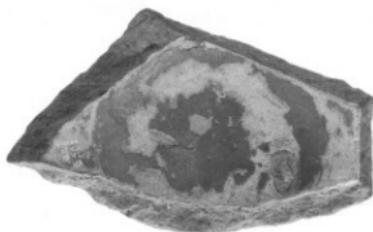
土坑 SK04 完掘状況（南から）



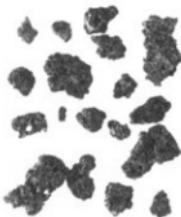
出土遺物（三）



1-A



1-B



2

- 1 刻書のある瓦質土器 (+)  
1-A 外面に「天匱」の刻書  
1-B 内面に漆膜付着  
2 タール状炭化物 (+)  
3 木炭片 (+)



3

## 報告書抄録

ふりがな	とやましないいせきはつくちょうさがいのように よかたきたくばいせき						
書名	富山市内遺跡発掘調査概要Ⅱ 四方北窪遺跡						
編著者名	古川知明						
編集機関	富山市教育委員会						
所在地	〒930 富山県富山市新桜町7番38号 TEL(0764)43-2138						
発行年月日	西暦1998年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 °°°	東経 °°°	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
四方北窪遺跡	富山県富山市 四方北窪字永 代前	16201 012	36度 45分 20秒	137度 12分 10秒	19971006 ~ 19971023	90	個人住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項
四方北窪遺跡	集落跡	平安 中世 近世	穴、溝 焼壁土坑	土師器、須恵器、土錐、叩石 土師質土器、珠洲焼、瀬戸焼、瓦質 土器(天目写) 越中瀬戸焼、唐津焼			焼壁土坑は骨片 が出土し、火葬 坑と考えられる。

**富山市内遺跡発掘調査概要Ⅱ**

**四方北窪遺跡**

1998(平成10)年3月31日

編集・発行 富山市教育委員会

富山市新桜町7番38号